

＜そらち考 人口減時代のあした＞

「合葬墓」高まる需要 代々継承に不安 公設整備も進む



合葬墓「結の苑」で手を合わせる人。合葬墓は空知管内で広まりつつある

急激な人口減少と高齢化が進む空

知管内で、複数の遺骨を1カ所にまとめて埋葬する「合葬墓(がっそうば)」の需要が高まっている。墓を継承したり手入れしたりすることが難しくなり、「墓じまい」に踏み切る人が増えているため。自治体による合葬墓の整備も進んでおり、今後さらに広まりそうだ。

「道外に住む長男と長女は墓の面倒を見られない。負担を掛けたくない」。滝川市の男性(82)は昨年6月、同市の滝の川墓地に埋葬していた両親の遺骨を三笠市大里の合葬墓「結(ゆい)の苑(その)」に移した。「割り切るしかない。ほったらかしにする方が粗末になる」。男性は死後に入る自身の「生前予約」も済ませた。

■4年で約1千体

結の苑は2014年に北海道中央霊園(本部・岩見沢)が設けた。遺骨2千体を埋葬でき、今年2月末までの4年弱で約1100体を納めた。武田寛理事長は「当初は年100体程度を見込んだ。墓じまいして1人で4、5体を納める人もいる」と驚く。年内に新たな合葬墓を増設する。

「墓は長男が継ぐ」という考えが根強い中、子どもがいなかったり、娘しかいなかったりする人からの相談も多いという。15年に胆振管内白老町から結の苑に遺骨を移した苫小牧市の山中広志さん(56)は「長男は埼玉で家庭を持ち、(身近に)長女しかいない。墓の継承が難しくなると分かっていた」と振り返る。

■高齢化も背景に

管内の人口は住民基本台帳ベースで昨年10月末までに30万人を切り、人口に占める65歳以上の割合を示す高齢化率は37・4%（昨年1月1日現在）。檜山管内の39・1%に次ぐ。人口流出と少子化により、墓の維持が難しくなっている。

管内では、自治体による公設の合葬墓の整備も進む。岩見沢市は昨年9月、緑が丘霊園内に遺骨をまとめて納める納骨塚（3千体分）を設置。申し込みは今年3月末までに55件144体に上った。市の見込みではこの期間の申し込みは100体ほどだった。このほか墓参りしにくい人を想定し、市は緑が丘霊園などの墓の掃除サービスをふるさと納税の返礼品に加えた。

深川市は一已墓地内に合葬墓（1500体分）を整備し、今月2日から受け付けを始めた。砂川市も北吉野墓地内に本年度中に合葬墓（1500体分）を造成する予定だ。

美唄市は17年度、合葬墓について市民アンケート（回答数3143件）を実施。合葬墓が「必要」と答えた人の割合は7割弱に上った。同市は「数年前から合葬墓への要望が多くなっている」として整備を検討する。

（勝間田翔）